

# 社会科学方法論としての弁証法の定式化 表象および存在形態と本質 (上)

板 木 雅 彦

## 目 次

はじめに

第1節 表象とその純化

第2節 純化された表象 要素と連関性 (以上, 本号)

第3節 存在形態と本質

1. 本質をとらえる

2. 存在形態

3. 一般的存在形態の二つの型 単層構造と多層構造

4. 一般的存在形態と仮象

5. 本質

6. 事物の生成 素材から要素へ

7. 矛盾

8. 三つの存在形態 一様性, 多様性, 統一性

9. 例証

## はじめに

再びわたしは、弁証法をわかりやすく定式化する作業に取り組みたいと思う。

いままで2回にわたるわたしの試み(板木(1996)(1997))は、残念ながら、それぞれ手痛い失敗に終わった。本稿のタイトルは、前回と同じく「社会科学方法論としての弁証法の定式化」としたが、その位置付けは、いわば前回の「再論」と言うべきものである。本稿の課題は、これまでと同様、きわめて明確である。社会科学を学び研究する人々がだれで

もどこでも容易に弁証法を活用できるように明解な定式化を行なうこと この一点に尽きている。

いままで弁証法に関して膨大な研究が積み重ねられてきたことを知らないわけではない。その一端をこれまでわたしも学んできたが、この一点においてどうしても納得することができなかった。国際経済論を専門分野としているわたしの最大の不満は、日常の具体的な研究対象に接したときに、体系的でしかも操作可能な形で弁証法が方法論化されていないということであった。

エンゲルスが『自然の弁証法』のなかで定式化した三つの法則、すなわち、量から質への転化、またその逆の転化の法則、対立物の相互浸透の法則、否定の否定の法則が、具体的な研究の進展に応じて仰ぎ見るごとに、ますます輝きをますます導きの星であることは間違いない。しかし、科学方法論として不可欠な操作可能性の面においては、わたしたち社会学者が現実を抱える問題とのあいだに、あまりに落差があり過ぎる。この両者のあいだをどのように架橋するか これがわたしをながらく悩ませてきた課題であった。

このような方法論上の課題を抱えつつ経済学を専攻するわたしがもっとも容易に理解することができて、しかも目を洗われる思いがした著作が、見田石介氏の『科学論』[1958]と『資本論の方法』[1963]であった。

氏の資本論理解は、経済学と方法論に関するそれまでのわたしの観念を一新したと言ってよい。その邂逅以来ほぼ20年、どうにかして氏の方法を定式化したいものだと願ってきた。その後、1993年の秋に具体的な着想を得て以来8年にわたって、組み立てては崩し、崩しては再び組み立て直してきた研究成果の一応の取りまとめが本稿の内容である。いま改めて振り返ってみれば、表面上ほとんど痕跡を残さないくらい消化され吸収されたものになっていると思うが、氏の議論は、わたしの方法論研究に決定的な影響を及ぼしたといってよい。

しかし、完成稿にはまだまだ程遠い。専門分野で具体的な事物の分析を一つ積み重ねるごとに、新しい方法上の疑問がまた一つ湧いてくる。残念ではあるが、これがわたしの研究の現段階である。今後の研鑽を約束することで、読者のご寛恕を乞いたい。

以上が本稿の第一の、そしてもっとも重要な課題であるとすれば、第二の、あるいは「隠された」課題は、わたしが年来温めてきた「分析的分かち書き」のアイデアをここではじめて実践することにある。

「隠された」とは言ってもすでに冒頭から明々白々なように、このアイデアの核心は、内容に応じて段落を切り分けることによって、論旨の構造を視覚化してしまおうというもの

である。

大学入学仕立の頃、アダム・スミス『諸国民の富』[1776] キャンン版（1904年）の翻訳に岩波文庫（大内兵衛、松川七郎訳、1959年）ではじめて接したとき、わたしは強い衝撃を受けた。よく知られているように、編者エドウィン・キャンンは、アダム・スミスの原著に数多くの編者注を付しただけでなく、段落ごとに和訳では [ ] でくくったきわめて短い要約を書き加えている。古典を読むことに慣れていないわたしのような初学者にとって、この簡潔な「頭約」とでも呼ぶべき工夫は、なんとも便利な代物であった。

たとえば、ある章の内容をざっと概観したり、振り返ってみたりするときには、この「頭約」だけを読んでいけばよい。というも、「頭約」をつなぐだけで立派な文章になるように工夫されているからである。とくに長大な古典を読み込んでいくのに、この「頭約」は、たいへん役に立った。索引を付けたり、あるいはこれをコンピュータ化して、キーワード検索が行なえるようにした古典も今日では数多く出版されるようになってきているが、ほぼ100年前に、これとはまた異なる発想と方法で、膨大な情報量をもった古典の情報処理が試みられていたわけである。

ただ、このように「頭約」はたしかに便利な工夫ではあるが、これを付すのに相当の手間暇がかかるのが難点と言えば難点であろう。もっと簡略で、しかも文章の内容のもっている構造そのものを明解に視覚化して表示することはできないだろうか。これが年来わたしの頭の片隅にあった宿題である。これに対するわたしなりの回答は、ご覧のとおり、「論旨が変われば段落を変えて2マス落とす」というきわめて簡単な書き方のルール、すなわち「分析的分かち書き」である。

この単純な原則に対する付則、あるいは例外として、従来の文章作法との相違点、類似点を各々一つずつあげておきたい。

まず相違点。従来は各段落の最初に1マス落としていたが、「分析的分かち書き」ではこれを行なわない。すでに「2マス」「4マス」あるいは「6マス」落としているのだから、この必要はないと考えられるからである。

次に類似点。しかしそうはいつでも、箇所によっては2マス落とし、あるいは4マス落としが連続して現れることがある。この場合、とくに前段がちょうど行の最後で終了していると、段落が変わっているかどうか見分けがつかなくなるので、従来通り次の段落の最初を1マス落としとした。やや折衷的だが、これによって論旨展開に正確を期することができると思う。

この方法にはいくつかの利点がある。

第一に、ページを一目見ただけで論旨の構造を把握することができる。まだ実際に内容を読んでいない場合でさえ、構造だけはすでに視覚的に明示されている。この利益はきわめて大きい。

論旨の全体構造の中で、いま自分がどのような位置付けのもとにあるセンテンスやパラグラフを読んでいるのかを、リアル・タイムで意識しながら読み進めることができる。いま実際にわたしのこの論文をお読みの読者も、目の片隅・左側に映る「2マス」「4マス」あるいは「6マス」の空白が、脳髄に常時信号を発信していることを実感しておられるだろう。したがって、読み手の目的によっては全文を通読する必要もなく、「2マス落とし」の箇所だけを目で追って全体の趣旨をつかんだり、そのうえで必要箇所の詳細を「4マス落とし」「6マス落とし」で確かめたりすることが容易に可能になる。

第二に、原則がきわめて単純なために、誰でもどこでもいつでも採用することができる。しかも、分かち書きを行なう箇所は各自の理解や解釈にしたがって自由自在だから、著者と読者とで違った分かち書きを行なうこともできる。また、これから新規に作成される文章だけでなく、これまで書かれてきた文章をこの方法で再構成することもできる。そして、どこで分かち書きを行なうかによって、理解や解釈の違いを明確化し討論の素材とすることができる。

ただし、一度自分で試みてみればすぐにもわかることだが、いままで書かれた文章が「分析的分かち書き」の構成としてしっかりととはまりきるとはかぎらない。いやむしろ、どことなく不具合な落ち着きの悪さを残すことの方が多い。では、その原因はいったいどこからくるかということ、多くの場合、論旨の飛躍や行きつ戻りつのジグザク論理のためであり、そのようなままで覆い隠されてきた論理的不具合が、「分析的分かち書き」を採用することでいやでもあぶり出されてくるわけである。このことも、「分析的分かち書き」の隠れた効用であるといえることができるだろう。

第三に、ワードプロセッサやコンピュータが発達した今日では、いとも簡単に分かち書きの作業を行なうことができる。また、その変更も自由自在である。その意味で、この方法を「ワープロ時代の文書作成法」と名付けても、あながち言い過ぎではないと思う。

ワープロの特性にかかわらせてさらに付け加えれば、「2マス落とし」「4マス落とし」等々でひとくくりにした段落を新たに挿入、削除、追加、訂正、移動するといった書き手の側の基本的な諸作業が、通常文書作成法に比べて格段に自由かつ柔軟に行なうことができる。思考と作業を行きつ戻りつさせながら、一人の書き手が、あるいは複数の書き手が知的成果を蓄え膨らませていくのにふさわしい構造上の特性を備え

ている。

そして最後に、このような「分析的分かち書き」を行なうことが、書き手に論旨の明確化を否応なく迫るという利点がある。

長々と書き連ねられ、ただ茫漠とした印象しか残さない文字列に換えて、クラスター（房状）化された論理が視覚的に提示されることによって、否応なく読み手の認識レベルが引き上げられる。もう、お手軽な言葉の煙幕やごまかしは効かない。ある命題が提起されても、次の「2マス落とし」でその論拠や証拠が明示されていなければ、たんなる「言いつ放し」であることは、火を見るよりも明らかとなる。

このように、簡明であること、操作容易であること、そして何よりも、書き手と読み手の個性を包み込める柔軟性を備えていること　これらが、本稿ではじめて「分析的分かち書き」の採用を決意した理由である。このことによって、文字列としてはまったく同じ内容でありながら、より整理され体系化された格段に質の高い情報が書き手から読み手へと伝達されることを期待している。

誰でもどこでも容易に使える分析用具としての弁証法の定式化、そしてその分析成果を誰でもどこでも容易に伝達できるコミュニケーション手段としての「分析的分かち書き」　この両者が一対のものとなっていることが、ここからおわかりいただけるだろう。

以上のような二つの課題を掲げた本稿の内容は、実際まだまだ未熟である。しかし、マルクス主義研究者を含む多くの社会科学研究者のあいだで、相互理解と相互批判、そして協力関係に支えられた専門研究の深化のための方法論的土台を作り上げていく共同作業と、その成果を幅広い読者に伝播していく作業とに、本稿がわずかでも役立つことができれば、幸いである。

## 第1節 表象とその純化

わたしたちが、日常生活のなかで、あるいは政治生活、知的生活のなかで得たさまざまな経験は、わたしたちの感覚器官を通じて次第に意識として定着していく。それは、いわば諸経験のごった煮で、同じような傾向を示すものも含まれていれば、互いに矛盾し合っているようなものも同時に含まれている。一応感覚的には整理されていると言えるかも知れないが、諸経験を秩序立てて整理したとはとうてい言えないような代物である。これをわたしたちは、**表象**<sup>1)</sup>とよぶ。

ヘーゲルはかつて、「哲学は表象を思想やカテゴリーに、より正確に言えば概念に変えるものだと言うことができる」(ヘーゲル[1817]上, 65ページ)と述べたが、この哲学の役割に関する言及は、科学的な研究がめざすものと完全に一致している。科学は、事実と

経験にもとづく以外、どこからも出発することができない。しかしまた、たんなる事実と経験を列挙するだけでは、科学といえない。

そこで、ヘーゲルの考えを敷衍しながら科学の分析の道筋をあらかじめ要約しておく、科学的分析とは、まず何をおいても事物の表象から出発し、その**概念**に到達することであると言うことができる。

まず、研究対象である事物の表象を分析することによって、事物がそもそも何であるのか、そしてどのように存在しているのかを明らかにする。言い換えれば、その本質と存在形態を明らかにするわけである。そして次に、事物が運動を行なっていくときに、どのような機能がその運動を可能にしているのかを明らかにする。つまり、事物の機能形態である。さらに、事物が事物そのものにとどまっているためには、事物が無制限にどこまでも発展していったら困るから、限度以上の発展を制限するメカニズムが明らかにされなければならない。つまり、事物の制限形態がそれである。そして最後に、事物が生まれてくる生成過程と、事物が新しい段階に展開する転換過程、さらに新しい事物に生まれ変わる発展過程が明らかにされる。実際の分析過程では、これらの項目が相前後したり重なり合ったりすることになるが、大きく言ってこれが科学的分析のたどるもっとも粗い道筋である。そして、このような本質と諸形態と諸過程の総体が事物の概念なのである。

なおここであらかじめ指摘しておけば、分析過程の最後に登場した生成・転換・発展過程　これをひとくくりにして歴史過程と呼ぶことができる　が、わたしたちの研究の最終目的地である。つまり、事物の歴史性をつかむこと、ここにこそ社会科学の究極の課題があるとわたしたちは考える。事物の存在形態論と機能形態論は、歴史過程の研究のためのいわば序説に相当するといつてよからう。

さて、哲学の使命、科学の課題が事物の「概念的把握」であるとひとまずおいたとして、ではそもそもどのような理由からわたしたちはそのような「概念的把握」を目指さなければならないのだろうか。功利的な物の言い方をすれば、そのことからいったいどのような便宜が生まれるのだろうか。

ただ、「概念」という言葉をいまはじめて聞き知ったわたしたちにとって、これは少々荷が勝ち過ぎる質問と言わなくてはならない。そこで、これをわたしたちの頭の中でガンガンとハンマーが何かで砕いてしまつて、「言葉」とか「物の名前」といった日常語に置き換えて、以下、問題を考えてみるとわかりやすいだろう<sup>2)</sup>。

では問題の取り掛かりとして、都市計画家や建築家が仕事をしている様子を心に思い描いてみよう（塩沢（1997）51-52ページ参照）。「広場」「泉」「回廊」「ホール」「舞台」「階段」「扉」といった言葉・名前は、彼らが自由に操作することのできる一種の記号のようなものとして存在している。つまり、ある特定の仕様をもってある特定の場所に据え付けられ

る広場や扉といったものではなく、むしろいくつもの広場や扉一般がもつ特殊な機能を指し示す言葉として存在している。そして、彼らが都市空間や居住空間を設計する場合に、これらの記号が、あたかも模型の「広場」や「扉」のようにして彼らの頭のなかの空間のあちこちに移動され敷設されるわけである。言い換えれば、空間を構成する諸要素の「観念に付けられたつまみ」のようなものとして、自由に操ることを可能にするわけである。言葉が具体的で豊かな表象を与えるものであればあるほど、その言葉は、わたしたちの脳髓により正確なイメージを喚起する。そして、脳の中で繰り広げられる空間的思考実験に高度の操作可能性を付与することになる。

概念がもたらす便宜をわたしたちは、以上のようなものとして理解することができるのではないだろうか。

概念を支える豊かな表象が存在し、両者のあいだに正確な対応関係が結ばれていることによって概念は、本来的には仮想（virtuality）でありながら強烈な現実感（reality）を發揮することができる。このような概念であればこそ、現実世界とのあいだに一定の乖離をもちつつも、大きく過たずに事物の過去と現状と未来を言い当てることができる。このように考えるならば、事物の概念的把握という人間の知的活動そのものが、たんに哲学や科学といった高度な領域に限定されているわけではけっしてなくて、わたしたちのありとあらゆる思考がすべて、概念にもとづいていること、そして概念を操作することではじめて可能になるということが納得される。

「概念」と聞いて、何かおどろおどろしいものを想像する必要はけっしてない。医者が出す「ああ、風邪ですね」という診断も一つの概念であるし、女性たちが出勤前にさんざん悩んだあげく「よし、今日はレトロ（復古調、懐古調）でいくわ」と決断したファッションもまた一つの概念である。

熱がでていると聞けば解熱剤を与え、下痢をしていると言えれば下痢止めを処方してくれるだけの医者は、言うまでもなくヤブ医者である。それらの症状を引き起こしているのは、はたしてたんなる風邪なのか、あるいは重症の盲腸なのか。そんな患者の心配をよそに、熱には解熱剤、下痢には下痢止めといった対処療法では、病気を根治することはとうていできない。

靴は靴だけ、スカーフはスカーフだけ、帽子は帽子だけというのでは、周囲を「ほう」と唸らせるトータル・ファッションはおぼつかない。そのすべてに含まれ、そのすべてを貫き、しかしその特定のアイテムの中に明示的に書き込まれているわけではけっしてない包括的なファッション思想が、この場合の概念である。

昨今わたしたちのまわりでは、さまざまな折りに「コンセプト」という言葉を耳にする機会が多くなった。コンセプトとは概念のことである。ただ、日常の場ではキャッチ・コピー（広

告・宣伝文句)のようなものも含めて広くこの言葉が使われているから、それがそのままここでわたしたちの議論している「概念」の内容だと思い込んでしまうと困る。しかし、このような事情を割り引いて考えてもなお、職場や学校といった日々の生活の場で「コンセプト」という言葉が頻りに交わされていることに大きな励ましを感じず。ここからわたしたちは、現実社会の発達に促迫されて日々豊かになる「概念」の表象にしっかりと依拠しながら、この言葉に秘められた宝を探っていくことにしよう。

日常生活の喧騒から一步退き、さてさてこの事物はいったいぜんたい何なのだろう、と分析的な眼をもって物事を見つめようとするとき、いつもわたしたちは奇妙な事態にぶつかる。さまざまに観察し実験したあげく、ようやくその事物の何であるかをつかんだと思った瞬間、その事物がつねにその「何か」から変化しつつあるという事実を突き付けられる。

生物とは生命をもって活動している有機体であるにとらえた瞬間、生物とはまたつねに死につつある有機体でもあるという動かせない事実が、わたしたちに突き付けられる。資本主義とはつねに競争にさらされた経済社会であるにとらえた瞬間、資本主義とは同時に、競争を否定して独占に向かう社会でもあるという動かせない歴史的事実が突き付けられる。そして、現実の歴史的に具体的な存在は、つねに生であると同時に死、競争とともに独占なのである。

このように、わたしたちを取り巻くありとあらゆる事物が、つねに**変化と運動**のなかに、そして変化と運動のなかにのみ存在していることは、わたしたちのだれもが知っている事実であり表象である。動物も植物も、あるいは無機物さえも、そのままの姿でいつまでもとどまっていることは決してなく、一瞬一瞬に何らかの変化をとげつつある。そして、わたしたち人間の形成する社会関係も、この例外ではない。だから、科学の任務が事物の何であるかを明らかにすることであるならば、事物の変化・運動をとらえることのできる方法論を備えていることが、科学が第一に要求される条件であることがわかる。では、それをどうとらえるか。

わたしたちが「AがBに変化した」と言うとき、そこにさまざまな種類の変化・運動がありうることを知っている。

量的に大きな変化もあれば、小さな変化もある。事物のもつ意味を根本的に変えてしまうような変化もあれば、表面的な変化もある。生まれたばかりの単純な姿から、さまざまな機能や器官（機関）を発達させていく変化もある。これらはすべて、現実世界のさまざまな現象がわたしたちの意識のなかに反映されて形成された、事物の変化と運動に関する豊かな表象の数々である。

しかし、わたしたちの日々の経験のなかで出会う変化・運動のなかで、もっとも著しく、驚愕に値するものは、あるものが質的にまったくの反対物、対立物へ転化していってしま



うような変化であろう。

生物の古い個体が死んで新しい個体が生まれる，自由競争が独占へ転化して新しい競争が生まれる，古い革新政党が保守に墮して新しい革新政党が生まれる，等々。つまり，Aが一定の質を保ちながら，たんに量的に変化してA'やA"に変化するのではなく，根本的に性質を変えてしまって，Aの正反対物Aに変化する類の変化がそれである。もし，A'やA"に量的に変化したただけならば，Aであることに変わりはないと言うことも可能だが，AがAに変化してしまったのでは，これを変化でないと言い張ることはけっしてできない。

したがって，「AがBに変化した」という表現で意味されていることの核心をとらえるためには，A'やA"だけでなく，Aから正反対物Aへの変化も合わせて分析できる方法をどうしても工夫しなければならないことになるだろう。まず何よりもこのような事物の変化と運動を分析する課題に真正面から応えようとするものが，**弁証法**なのである。

もちろん，量的な変化は変化でない，変化の名に値しないと主張しているのではない。いやそれどころか，一般に「量の質への転化」と言い習わされているように，量的な変化こそあらゆる質的な変化を引き起こす原動力の役割を担っている。しかし，正反対物への質的な変化を引き起こすに至っていないたんなる量的な変化は，いまだ完結していない変化であり，そのため，その事物が何であり，何に変化していくのかを認識するには不完全な分析対象である。だから，質的な変化だけを重視して，量的な変化をないがしろにするとというのではなく，むしろ，たんなる量的変化とともに，十分な量的変化に裏付けられた質的变化，あるいは，正反対物への質的变化として現れるまで成熟した量的変化も合わせてとらえることのできる方法を追求しているのである。

以上の考察を通じてわたしたちは，事物の構造と運動をとらえることのできる方法がいったいどのようなものでなければならぬかという「方法の表象」へ向かって少しずつ歩みを進めてきた。事物の存在をもっとも正確にわたしたちの認識に反映することのできる方法というのがそれである。

しかし，事物の認識というものは，通り一遍の「定義」で済ますことができるほど一筋縄ではない。対象は，動く標的だ。このつねに動いている標的に向かって，一方向に固定された大砲ではまったく歯が立たない。この「とうてい歯が立たない」ということを，明治の末にきわめて鮮やかに描き切ったものとして，夏目漱石の講演「現代日本の開化」を取り上げてみよう。たいへん長々とした引用だが，漱石の躍動する思想を伝えるためにも，該当箇所をそのまま引用しておきたい。

「尤も定義を下すについてはよほど気を付けないと飛んでもない事になる。これをむ

ずかしく言いますと、定義を下せばその定義のために定義を下されたものがピタリと糊細工のようにこわ張ってしまう。複雑な特性を簡単にまとめる学者の手際と脳力には敬服しながらも、一方においてその迂闊を惜しまなければならないような事が彼らの下した定義を見るとよくあります。その弊所を極分かりやすく一口にお話しすれば生きたものをわざと四角四面の棺の中に入れてことさらに融通が利かないようにするからである。尤も幾何学などで中心から円周に至る距離が悉く等しいものを円というというような定義はあれで差つかえない、定義の便宜があって弊害のない結構なものですが、これは実世間に存在する円いものを説明するといわんよりむしろ理想的に頭の中にある円というものをかく約束上取り決めたまでであるから古往今来変わりっこないので何処までもこの定義一点張りで押して行かれるのです。その他四角だろうが三角だろうが幾何的に存在している限りはそれぞれの定義で一旦まとめたら決して動かす必要もないかも知れないが、不幸にして現実世の中にある円とか四角とか三角とかいうもので過去現在未来を通じて動かないものは甚だ少ない。ことにそれ自身に活動力を具えて生存するものには変化消長が何処までも付けまわっている。今日の四角は明日の三角にならないとも限らないし、明日の三角がまたいつ円く崩れださないともいえない。要するに幾何学のように定義があってその定義から物をこしらえ出したのでなくて、物があってその物を説明するために定義を作るとなると勢いその物の変化を見越してその意味を含ましたものでなければいわゆる杓子定規とかで一向気の利かない定義になってしまいます。丁度汽車がゴーッと駆けて来る、その運動の一瞬間即ち運動の性質の最も現れにくい刹那の光景を写真に取って、これが汽車だ汽車だといってあたかも汽車の凡てを一枚の裏に写し得た如く吹聴すると一般である。なるほど何処から見ても汽車に違いありません。けれども汽車に見逃してはならない運動というものがこの写真のうちには出ていないのだから実際の汽車とは到底比較の出来ない位懸絶しているといわなければなりません。御存じの琥珀というものがあつて、琥珀の中に時々蠅がはいったのがある。透かして見ると蠅に違いありませんが、要するに動きの取れない蠅であります。蠅でないとは言えぬでしょうが活きた蠅とはいえます。学者の下す定義にはこの写真の汽車や琥珀の中の蠅に似て鮮やかに見えるが死んでいると評しなければならないものがある。それで注意を要するということであります。つまり変化をするものを捉えて変化を許さぬかの如くピタリと定義を下す。巡查というものは白い服を着てサーベルを下げているものなどと天から極められた日には巡查も遣り切れなんでしょう。家へ帰って浴衣も着替える訳に行かなくなる。この暑いのに剣ばかり下げていると済まないのは可哀相だ。騎兵とは馬に乗るものである。これも御尤もには違いないが、いくら騎兵だって年が年中

馬に乗りつづけに乗っている訳にも行かないじゃありませんか。少しは下りたいですア。こう例を挙げれば際限がないから好加減に切り上げます。」（夏目 [ 1911 ] (1986) 11-13ページ）

いやはや、なんとも鮮やかに喝破したものである。「今日の四角は明日の三角にならないとも限らないし、明日の三角がまたいつ円く崩れださないともいえない」などと聞かされた和歌山の聴衆が、目を白黒させている様子が目に浮かぶようである。しかし逆に、定義で事物はとらえられないといって、動く標的を相手にいきなり大砲を前後左右にやたら振り回してみても、惨めな結果になるだけだ。まずは固定された仮の標的を相手に、照準の合わせ方を綿密に習得しておかなければなるまい。このアナロジーで言えば、事物の生命である運動をひとまず認識の上でストップさせ、静態的な分析環境を認識のなかに作り上げて、一つの「思考実験」を試みるわけである。

自然科学が摂氏0度（273.15K）、1気圧（1034パスカル）の「標準状態」のなかで、きわめて純度の高い試薬を用いて実験を行なうように、社会科学においても、現実世界のさまざまな表象のなかから当面の分析にとって非本質的と思われる性質や形態を取り除き（捨象）、もっとも本質的なものを純粹に分離（抽象）して得られた純化された表象を「思考実験室」のなかに組み立てる。わたしたちは、この純化された表象のなかから、分析の力によって、事物の本質を探り出していくわけである。

さてここで、分析という作業がけっして表象全体に対して施されるのではないということに注意を促しておきたい。

表象は、もうこれ以上ないというほど事物のあらゆる側面や形態を含んだ豊かなものでなければならない。その豊穡さこそ、後々研究の成果を総合していく際の鍵となる。しかし他方で、その豊穡さが、単純明快な本質をえぐり取る際に仇となる。本来、豊穡さというのは、同じような傾向や特徴をもった事実がたんにたくさん寄り集まっているといったことではない。

これを木々の枝に例えてみれば、同じ一本の太い幹から発しているも、こちらの枝はあっちを向き、あっちの枝はこっちを向いているという具合に、はなはだ「矛盾」した外観を示しているのが普通の姿である。そのような大木の成長の方向を見定めるには、一本一本の小枝や一枚一枚の葉っぱに気を取られるのではなく、むしろそれらを「えいや」とばかりに捨て去って、より太くて中心に近い幹の成長の具合に観察の眼を集中することが肝心だろう。

だから分析は、この大木の例でもわかるように、小枝や葉っぱはひとまずお預けにして、もうこれ以上でも以下でもないというほど絞り込まれた純化された表象に対して施される。

しかし、あらかじめ言うておけば、このいっけん干からびたようにさえみえる純化された表象から得られた単純な本質から、今度は逆方向に向かって、あの豊穡で複雑な表象がなぜそのようであればならないかを一つずつ説明していく作業が、研究における**総合**の過程なのである。

先ほど述べた存在形態、機能形態、制限形態、生成過程、転化過程、発展過程は、わかりやすく言えば、この複雑に入り組んだ小枝や葉っぱにあたると思えばよい。木全体の総合的な成長にもっとも適合した幹の成長方向を確定してはじめて、それとはいっけん矛盾するようにみえた小枝や葉っぱのさまざまな方向への成長が、じつは幹の成長のために光合成をもっとも効率よく行なうための工夫であったことが明らかになるのである。

表象を純化するということについて、もう一步踏み込んで考察しておこう。表象を純化する目的が事物の本質をつかみとることにあるのだから、純化作業の中心がさまざまな表象のなかからより本質的な側面や形態を分離していく作業であることは、言うまでもない。しかし、このことを裏返して言えば、非本質的な側面や形態をどんどん捨て去っていく作業とちょうど裏腹の関係にあることがわかる。つまり、非本質的なものを捨てて本質をすくいとる抽象と、本質をすくいとって非本質的なものを捨てる捨象という二つの裏腹の作業を統一して推し進めていくのが**表象の純化**という作業にほかならない。

このように述べると、何か意味のない言葉遊びのように受け取られるかも知れないが、けっしてそうではない。純化された表象が、抽象の結果すくいとられた本質的なものからなっていることは、言うまでもない。しかし、「本質をすくいとる」と言ったところで、最初から「本質的なもの」が透けて見えているわけではない。実際には、手にした表象を一つずつ慎重に吟味し、非本質的なものであればそれを順々に捨て去っていく作業の積み重ねの上にはじめて、本質は、すくいとられていくのである。

つまり、抽象は捨象を前提とし、その量的な積み重ねの上にはじめて成立する質的な飛躍であるということが出来る。この両者の関係は、けっして逆ではない。捨象、捨象、捨象、そしてまた捨象　この極みに成立するものが本質の抽象なのである<sup>3)</sup>。いずれにしても、この「表象の純化」という作業ほど研究上、決定的な重要性をもつ作業はないと言ってよい。

研究対象のうちで、いったい何を問題にすべきで、何を問題にすべきでないかがこの作業を通じて与えられる。分析が、いったいどの方向に進むべきで、どの方向には進むべきでないかがここで決定される。研究の成否は、複雑な問題の条件をどこまで解きほぐし、単純化できるかにかかっているからである。

「マルクスは客観的過程について、解決の条件は問題とともに与えられる、ということを行っているが、それはこの思惟という主観的過程においても完全にあてはまるのであって、われわれが実際に問題の解決ができないという場合をよく考えてみると、その多くは、問題の解決ができないのではなく、問題の条件が純化されないために、いろいろの問題が絡み合って、いったい何が問題であるかが、自分でもはっきりしていないためであることがわかる。

そしてこの問題が何であるかがはっきりすれば、すでに問題の解決の十中八九は達せられることになる。愚かなものはやさしい問題を解き、賢いものがむつかしい問題を解くのではない。反対に賢いものはいつでも易しい問題を解き、愚かなものは、いつでもむつかしい問題を解こうと試みているわけである。」（見田 [1963] 20ページ）

## 第2節 純化された表象 要素と連関性

では、事物の純化された表象とは、いったいどのようなものなのだろうか。この問題を考察するために、化学物質と原子量との関係を一つの表象として取り上げることからはじめよう。

よく知られているように（エンゲルス [1873-83] (1) 70-73ページ）、炭素Cと水素Hから構成される炭化水素は、メタン $CH_4$ 、エタン $C_2H_6$ からはじまって、 $C_nH_{2n+2}$ の公式にしたがって順次、炭素と水素の原子量を増加させる。このように、 $CH_2$ が順次付加されるという量的変化が、それぞれの炭化水素に固有の質的变化をもたらす、常温における状態を気体から固体へと変化させていく。この場合、炭素Cと水素Hという炭化水素の構成要素には、まったく変化がないのだから、それぞれの化合物の質的变化をもたらすものは、構成要素と構成要素の間をつないでいる関係の変化であると考えざるを得ない。したがって、炭化水素を炭化水素たらしめている本質は、 $CH_2$ という要素とそのつながり具合によって決定されていると考えなければならないだろう。

わたしたちは、このように要素そのものとは区別された諸要素間のつながり具合のことを、特別に**連関性**という言葉で表現していくことにしよう。

確かに、化学物質から得られるこの表象から類推していくと、さまざまな自然現象、社会現象、精神現象で同じような事態が観察されることに気がつく。

たとえば、多数の企業が製品の価格と品質をめぐる熾烈に競争する時代には自由競争が支配的だったが、この結果次第に企業数が減少し、一桁になるかならないかあたりまで生産と資本の集中が進むと、企業間でカルテルやトラストが結成されて、自由競争とは似ても似つかない独占が支配的となった。この場合も、同じ資本主義であるかぎり「企業」という構成要素には何の変化もない。ところが、企業数の減少という

量的な変化が、企業と企業を結ぶ関係 (= 連関性) を競争から結託へと決定的に変化させたわけである。

また、同様の事態は、わたしたちの日常的な精神現象においても起こりうる。

わたしたちが何かを知りたいと思うとき、まずそれに関するさまざまな「情報」を収集する。最初一つ二つの情報をみるかぎりでは、いったい何がどうなっているのかか、いもく見当もつかない状態であったのが、多くの情報が集められ、それらのあいだに因果関係やら作用・反作用の関係やらが次第に明らかになるにつれて、急にその実体がかつめめるようになったという経験は、誰にも一度や二度はあるはずである。この場合も、とりあえず「情報」というものを要素と考え、情報間の因果関係や作用・反作用関係といったつながり具合 (= 連関性) が、わたしたちが知りたいと思うその「何か」の質的な内容を決定づけていることがわかる。

このように、自然現象、社会現象、精神現象にかかわるさまざまな事物を変化と運動のなかに置いて観察すると、それらがいずれも**要素と連関性**と呼びうる二つのモメントから成り立っていることが感知される。この場合、**モメント**とは、事物や観念の全体を成り立たせている側面、**要素**、**段階**といった意味である (森 (1985) 477ページ)。

さて、要素とは、事物がその性質を失うことのない最小の単位をいう。わたしたちは、五官やさまざまな実験器具による観察を通じて、この最小単位を実証的にとらえることができる。そして、わたしたちの注意をこの最小単位に集中することによって、非本質的な事柄を捨て去って事物を純粋に観察することが可能になる。事物の分析は、まず何よりもこの一単位の要素から出発しなければならない。

ただし、このことは、事物の要素を見つけだし、確定する作業が比較的容易であるという意味ではけっしてない。むしろ、これ以降のすべての研究の成否を決定するほど重要で困難な研究段階が、この要素の確定である。たとえば、経済学における価値の本質とその量を決定する要素を「効用」に求めるのか、それとも「労働」に求めるのかによって、いわゆる近代経済学とマルクス経済学という二つの経済学派が袂をわかっている事実が、このことを十二分に証明している。

ところで、事物の純化された表象というならば、「要素」や「連関性」ではなく、むしろ「量」と「質」というカテゴリーから出発すべきではないかという意見もありうるだろう。

確かに、量と質は事物のもっとも基本的なカテゴリーである<sup>4)</sup>。しかし、基本的ではあっても、はたしてその内容は自明だろうか。「量」とは何か、「質」とは何か、という問題は、まだ何も検討を施されていない問題なのである。したがって、これらをア prioriに前提し、事物の純化された表象を規定することはできない。まず、感覚的にとらえるもの　ここからわたしたちのすべての分析を出発させよう。これがわ

たしたちに唯物論が教えるところである。

どれほど厳格に実証的な事実にもとづいて事物をことごとく要素に分解していったとしても、それでもなお否定できないものが残される。それが要素と要素との連関性である。これがなぜ要素とは別の独自のものとして存在していることが確証されるかという、要素の結合物が要素そのものとはまったく異なる性質を示すことをわたしたちが日常の経験と観察から知っているからである。

もし、諸要素の結合物が要素そのものとまったく変わらない性質を示しているとしたら、それは要素が連結したのではなく、それがたんに複数並存しているにすぎない。したがってここから、事物に独自の質は、諸要素がどのように連結しているかということすなわち、その連関性によって生じていることがわかる。したがってまた、連結する要素の量が増減し連結の具合が変化することによって、事物はその質を変化させることがわかる。このことは、わたしたちのいままでの例からも十分明らかだろうと思う。

このように、要素は事物の量的側面を表わしているのに対して、連関性は事物に独自の質的側面を表わしている。そして、要素というかぎり、複数の要素が互いに連結しあっていることがつねに前提されており、その互いの連結のなかから連関性が生まれていることがまた同時に前提されている。逆に、連関性というかぎり、それ自体は何か実体をもったものではけっしてなく、実体をもった諸要素を前提としてはじめて成り立つ関係的なカテゴリーである。このように、要素と連関性とは、互いに相手方を、そして相手方だけを前提とした事物の対立する二つのモメントであることがわかる。

以上が事物の純化された表象である。わたしたちは、これを次のような記号を使って定式化しておくことにしよう。

事物の表象 = [ 連関性      要素 ]

事物を構成している二つのモメントのうち、実体をもった要素のモメントを右側に書いて、これを**次要なモメント**と呼ぶ。これに対して、要素と要素のあいだの関係を表わす連関性のモメントを左側に書いて、これを**主要なモメント**と呼ぶ。

なぜ連関性のモメントの側から太い矢印が発し、これを「主要なモメント」と呼ぶかという、事物を特徴づけている質が、この連関性のモメントに負っているからである。これに対して、要素のモメントは、事物の量的な側面を表わしている。なぜなら、実体をもたない連関性が事物の量を表わすことは、不可能だからである。

確かに、一つ一つの要素そのものも一定の質をもっているが、この質と、諸要素が連

結して生み出す事物自体の質とは別物であることに留意しなければならない。上の炭化水素の例で言えば、一つ一つの炭素原子や水素原子のもっている質と、それらから構成される炭化水素そのものの質が異なっていることから、このことが理解されると思う。

このように、上の定式を構成する二つのモメントは、互いに「対立的な関係」にあるということができる。ただ、ここで**対立**と呼ぶものは、通常**矛盾**とか**闘争**と呼ばれるカテゴリーとは異なるものである。

互いに並び立つことのできない二つの事物の現実の闘争関係・状態を後者の「矛盾・闘争」が意味しているのに対して、前者の「対立」は、まったく正反対の性質をもった、しかも互いに相手を不可分、不可欠のものとして必要としている二つのモメントが、一つの事物のなかに共存しつつその事物を構成している関係・状態を意味している。

以上のように、わたしたちの目に見えるがままの事物の変化と運動から出発して、事物の存在を二つの対立的モメントの統一として理解することが、弁証法的な認識方法の重要な一側面である<sup>5)</sup>。わたしたちは、このような弁証法的な認識方法の真髄である「対立物の統一」の関係を表わす上記の定式 [ ] を**弁証法の基本定式**と呼ぶことにしよう。なお、この基本定式の二つのモメントの関係 互いに対立物としてまったく逆の関係にありながら、同時に不可欠で切り離せない関係にあり、しかも主要と次要の関係にあるものが、**反照(反省)関係**とよばれるものである<sup>6)</sup>。

ところで、ヘーゲルが「哲学の任務は表象を概念に変えることである」と述べたことはすでに触れたが、彼はまた、「学問および特に哲学の任務が、偶然の仮象のもとにかくされている必然を認識することにあるというのは、全く正しい」(ヘーゲル [1817] 下, 92ページ)とも述べている。ただ、同じ箇所ではヘーゲルが述べているように、科学は、けっして偶然性を排除するものではないし、またできるものでもない<sup>7)</sup>。この偶然性を通じて貫いている事物の必然的な諸関係を明らかにすることが、科学の目的である。

したがって、わたしたちがここで検討している方法論とは、結局、事物の必然性の論証の形式はいかにあるべきかを考察することと言い換えることができる。そこで、弁証法の基本定式を改めて検討してみると、すでにこれが事物の必然性を認識し論証するためのもっとも基本的な形式であることがわかる。次にこの点をみていくことにしよう。

わたしたちはこれから、事物がとるあらゆる形態をこの基本定式に還元しながら理解していこうと思う。存在の三つの形態も、機能の三つの形態も、すべてこの基本定式から論理的に導きだしていくわけである。その際、基本定式を構成する両モメントが、たまたま事物のなかに見いだされた二つの側面といったものではけっしてないことに、ここで改めて注意を促しておくことにしよう。



このことは、次のことを意味している。主要なモメントがたとえばAであるならば、他方はかならずその反対物Aでなければならず、また同時に、次要なモメントがAであるならば、他方はかならずAでなければならないという関係にある。つまり、AとAは、互いに必要条件であると同時に十分条件でもあるという関係（[十分条件 必要条件]かつ[十分条件 必要条件]）である。言い換えれば両者は、互いにそうでなければならぬという意味で、**必然性の関係**にあるわけである。

もし、事物を構成する二つのモメントの関係が、「AならばBである（[A B]）」という一方的なものにすぎないとしたら、確かにAが存在すればかならずBであるには違いないが、なぜAがそもそもそこに存在しているかということは、Bにとってまったくあずかり知らないことになってしまう。つまり、AがそこにあるのはBにとってはたまたま偶然そうであるにすぎず、けっして必然的にそうでなければならぬわけではない。したがって、いっけん「必然性」を表わしているように見える「AならばBである」という関係も、結局、偶然的な関係に帰してしまう。また、逆の「BならばAである（[A B]）」という一方的な関係でも同様である。

しかし、互いに必要条件であると同時に十分条件でもある関係、あるいは、相手が現実にならざるための唯一の条件を相互に与えあう関係（[A B]）では、事態はまったく違って来る。事物を構成するモメントとしてAがそこにあればかならずBもそこにあり、逆にBがそこにあればかならずAもそこにある。しかも、BとはAのことなのだからそこにはAとBしか存在しない。これこそ、事物の根本的な構造の必然性を示すものである<sup>8)</sup>。

以上の説明から容易に理解されるように、弁証法の基本定式 [ ] が表わしている内容は、数学上の「必要かつ十分な条件」という概念と重なり合うものである。

ただ、数学上の「必要かつ十分な条件」の場合は、両辺は同値であって、その内容が完全に一致すると考えられているのに対して、弁証法の場合には、両モメントが対立物の統一ととらえられている点が根本的に異なっている。まったく正反対の対立物が数学上の「同値」の関係にある このことの中に、事物の本質を静態的にとらえようとする数学と、変化と運動の中に事物の本質をとらえる弁証法との違いがよく表わされているといえるだろう。

最後に、弁証法の基本定式を支えている唯物論的な基礎について触れておかなければならない。わたしたちは、事物の純化された表象を [ 連関性 要素 ] と定式化した。この要素は、正確には「物的要素」でなければならない。

すでにあげた例で言えば、炭化水素に対する  $CH_2$ 、資本主義に対する「企業」（より正確には個別資本）がそれである。また、精神現象が事物の場合には、その要素は、

物的事物を正確に反映したカテゴリーでなければならない。その点からすると、「情報」そのものを要素としてさまざまな「情報理論」を展開することがはたして妥当かどうかは、大いに議論の余地があるように思われる。

ここで少し、情報の基本単位は何か、という問題について考えてみよう。言い換えれば、情報を構成する物的要素は何かという問題である。

人間の脳は1000億以上の脳細胞から構成されている。脳細胞は、神経細胞（ニューロン）とグリア細胞からなり、電気信号を伝える神経細胞によって脳内の情報処理が行なわれると考えられている。この神経細胞（ニューロン）は突起（樹状突起）と、そこから長く伸びた軸索をもつ。そして、神経細胞（ニューロン）同士は、シナプスと呼ばれる部分で相互に接し、神経伝達物質をやり取りすることによって刺激を伝達する。つまり脳は、個々の神経細胞（ニューロン）が相互に連結して出来上がった膨大な数のネットワークによって構成されている。そして、このような特殊なネットワークが統合されることで、わたしたちの知覚、思考、行動に統一性がもたらされるわけである。その仕組みは、感覚器官から入力された電気信号が繰り返しニューロンを刺激することによって、特定のシナプス間の連結（＝神経ネットワーク）を強化していくというものである。

したがって、脳に受容された情報の単位とは、一つのシナプスともう一つのシナプスとの一対の連結状態であるということができるかもしれない。つまり、on/offで言えば、両者がonとしてつながっている状態がそれである。

このような情報の単位の理解は、通信工学やサイバネティクスにも共通するものである。そこでは、「同等に確からしい二つのことから、そのうちの一つを1回選択するときに伝えられる情報の量を情報量の単位とする」（ウィーナー [1961] (1962) 13ページ）と定義されている<sup>9)</sup>。

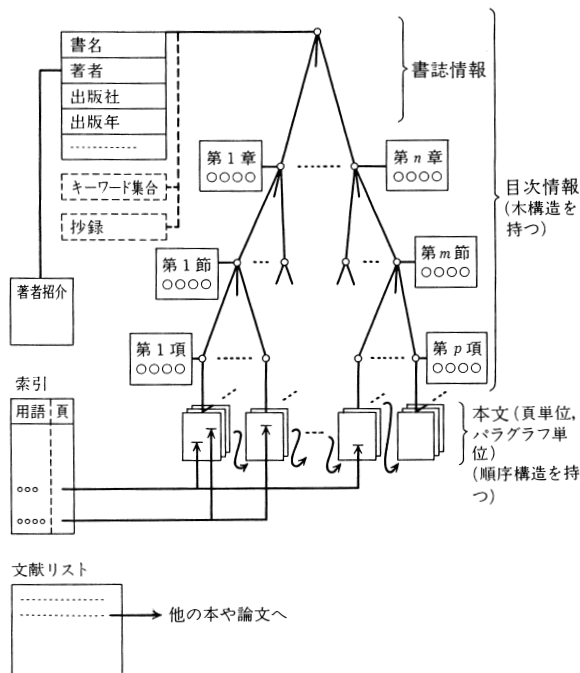
ある学説によると、脳は、このようなシナプス間の連結（＝神経ネットワーク）によって構成された多数の「細胞集合体」から成り立っているものと理解することができる。これらは、相互に複雑に重なり合っており、どのニューロンも同時にいくつかの細胞集合体に属している。そして、その一つ一つが特定の音や光、あるいはアイデアの断片に対応しているという。この説にしたがって情報をその受容体としての脳の側からとらえれば、この「細胞集合体」こそ、わたしたちの思考の基本要素であるということになる（ワールドロップ (1996) 206ページ）。

この「情報の物的基本単位は何か」という問題は、インターネット時代の今日、

いわゆる「電子図書館」の検索単位を定める際にもきわめて重要な問題として浮かび上がってくることになる（長尾（1994）第4章）。

誰もが何かに追いかけられながら暮らしているような「多忙な」現代社会においては、1冊の本をじっくりと最初からめくって読んでいくといった従来の読書スタイルは、だんだんと過去のものになりつつある。本の中から自分の目的とする「情報」を必要最小限読み取れば、その他の部分はまったく関心外のものとなる。そうすると、1冊の本全体が検索の対象となるのではなく、章や節や項、あるいはキーワードなどが新たな検索単位として登場してくる。このような観点から「図書」の構造を再構成したものが、下図である。

しかし、検索単位の問題は、それだけにとどまらない。今日の図書館が所蔵する情報メディアは、本、雑誌、議事録、音楽CD（コンパクト・ディスク）、映像ビデオ、オンライン統計情報、などなど、じつに多種多様である。このそれぞれに、あるいはこれらを統一した「マルチメディア検索単位」という意味における情報の基本単位は、いったいどのようなものになるのだろうか。これを適切に設定することが、21世紀の電子図書館にとって大きな課題となっている。



出所：長尾（1994）61ページ

このように、これから開始されるあらゆる分析の出発点となる要素を物的要素に厳格に限定する点で、わたしたちの基本定式のなかには、けっして揺るがせにはならない唯物論的基礎がしっかりとすえられているわけである。

神や絶対的理念から物質が生み出されるといった旧態依然たる観念論は、自然科学、社会科学、そして産業の圧倒的な発達の前に、今日ではもはや昔日の影響力を失っていると言ってよいのかもしれない。日々激変する日常の生活環境のなかで、現実と格闘しながら生活実践を行なっている人々にとっては、唯物論こそ世界観の中心にすえられていると言ってよからう。

しかし、このことは、わたしたち一人一人が自然科学であれ社会科学であれ事物の実際の分析を行なう際に、観念論の呪縛から完全に解き放たれているということをけっして意味しない。分析の端緒として何を「要素」にすえるかという問題が、このことをもっとも端的に物語っている。

社会科学に限定して言っても、実際わたしたちは、いったい何を分析の端緒にすえているだろうか。権力や覇権、貨幣、国家、外国貿易、国際機関、等々 はたしてこれらは、ある明解な実体をもった物的要素なのか、それともそれ自身は実体をもたない連関性から派生する概念なのだろうか。わたしたちは、往々にして、まるでこれらが実体的なカテゴリーであるかのようにアприオリに想定して、その運動や機能を論じてはいないだろうか。

連関性のモメントをあたかも実体的な要素のモメントのように取り扱ってはならない。それらは、より根源的な物的構成要素にまで還元して分析されなければならない。唯物論のこの鉄則を忘れた分析は、すべて空虚な観念論へ堕ちていかざるを得ないのである<sup>10)</sup>。(続く)

## 注

- 1) 「感情、直感、欲求、意志等々の諸規定性は、それらが意識されているかぎり、一般に表象とよぶことができる。」(ヘーゲル [1817] 上, 65ページ)
- 2) 蛇足ながら、「概念砕き」と日常語への変換が社会科学の発展にとってもつ今日的な意義については、内田 (1985) (1992) を参照。
- 3) 「分析に先だって抽象が行なわれることで、分析は、何か副次的なものや、別のものやに到達する一切の可能性を奪われて、求める当のものに行き着く以外にないように方向づけられる。……分析は与えられた事実の分析であるが、その与えられた事実は、マルクスではこのように抽象によって純化された事実なのである。」(見田 [1963] 19ページ)
- 4) カテゴリーとは、それぞれの科学の基本的概念であるということができる。その科学が研究対象としている事物を理論的に反映し表現したものである。たとえば、質量、速度、加速度、運動量等は力学のカテゴリーであり、商品、価値、貨幣、資本等は経済学のカテゴリーである。また、質、量、現象、本質、因果性、必然性、偶然性、可能性、現実性等が論理カテゴリーである。こ

れら諸カテゴリーの関係から法則が導きだされる（寺沢（1957）49ページ、森（1985）62-63ページ）。

- 5) 「あらゆる現実的なものは対立した規定を自分のうちに含んでおり、したがって、ある対象を認識、もっとはっきり言えば、概念的に把握するとは、対象を対立した規定の具体的統一として意識することを意味する」（ヘーゲル [1817] 上, 187ページ）
- 6) 『小論理学』の訳者、松村一人は、反照（反省）関係について次のように述べている。  
「Reflexion [反省], reflektierenという言葉は、ヘーゲルでは独自の意味に使われている。もともと、ラテン語のreflexioは、曲がり戻ることを意味する。ここから、光については、反射の意味となる。自己を省みるという場合の反省も、原意と無関係ではない。しかし、ヘーゲルは相関関係のうちにある二つのものを、その一方から出発して考察するとき、Reflexionという言葉を使う。例えば、支配者というものは、支配される者なしには存在せず、考えられず、自分自身のみからは理解できないものである。このような相関は、そこに存在しているのであるが、われわれが今支配者というものを理解しようとすれば、支配されるものへいき、そして再び支配者へ帰ってこなければならぬ。相関においては、かくして相関する互いの側から、このようなReflexionが行なわれるわけである。」（ヘーゲル [1817] 下, 15ページ）
- 7) 「しかしこのことは、偶然的なものは主観的な表象にのみ属し、したがって真理に達するにはそれを全く除去しなければならない、というような意味に理解されてはならない。一面的にこのような方向のみ進む学問的努力は、空虚な遊戯であり、融通のきかぬペダンチズムであるという正当な非難を免れることができないであろう。」（ヘーゲル [1817] 下, 92ページ）
- 8) 「因果関係は、必然性に属してはいるが、しかしそれは必然性の過程における一側面にすぎず、必然性の過程は、因果性のうちに含まれている媒介を揚棄して、自分が全くの自己関係であることを示すものである。」（ヘーゲル [1817] 下, 110ページ）
- 9) なお、情報量は、エントロピーと密接な関連をもっている。ウィーナーは、両者の関係について次のように述べている。「通報 [メッセージ] はそれ自体はパターンと組織性との一形態である。事実、一組の通報を外界の一組の状態と同様にあるエントロピーをもつものとして取り扱うことが可能である。エントロピーが非組織性の度を表わす量であるのと同様に、一組の通報によって運ばれる情報 [の量] は組織性の度を表わす量である。一つの通報によって運ばれる情報 [の量] というものは、その通報のもつエントロピーに負の符号をつけたものと本質的に同じものだと解釈することができる。したがって、その通報が、それが生ずる確率が大きなものであればあるほど、それが運ぶ情報は少ない。たとえば、きまり文句は、偉大な詩よりはるかに少ないものしかわれわれにもたらさない。」（ウィーナー [1954] (1979) 15-16ページ）
- 10) このことは、芸術においても同様である。芸術もまた、要素によって構成されている。ロダンの彫刻に対するリルケの理解を参照されたい。  
「こうしてついに彼の探求の向けられたのがこの面（Oberfläche）であった。面は光と物との無限に多くの出会いから成り立っていた。そして、この出会いのどの一つも他のものとは異なり、そのどれもが注目に値することもわかってきた。光と物とは、ここではたがいに親しくもてなしあっているかと思うと、あそこではためらいがちにただ挨拶をかわしている、かと思うとまたほかのところでは、たがいに知らぬ顔して通り過ぎていくように思われた。そしてこういう場所は無限にあり、しかも何事が起こっていないという場所の一つもなかった。空虚というものは存在しなかった。

この瞬間にロダンは彼の芸術の根本的要素を発見したのであった。いわば彼の世界を構成する細胞の発見であった。それこそ面なのであった。この種々に偉大な、種々に強調された、厳密に規定された面であった。これからすべてのものが作られねばならなかった。そのとき以来これは彼の芸術の素材となった。」(リルケ[1903], 17 18ページ)

「この発見とともに、ロダンのもっとも独自の制作が始まった。今になってはじめて、すべての慣習的な造形美術の概念が、彼にとって無価値となったのである。姿勢というものもなければ、群像というものもなく、また構成というものもなかった。あるものはただ無数の生動する面であった。あるものはただ生命であった。そして彼の見出した表現手段は、まともにこの生命に向かっていったのである。」(同上, 18ページ)

なお、訳者後記152ページも参照のこと。

## 参考文献

- 板木雅彦 (1989) 「企業内国際分業の労働体系」吉信肅編著『現代世界経済論の課題と日本』同文館, 41-64ページ
- 板木雅彦 (1996) 「研究ノート 社会科学方法論としての弁証法の定式化」『立命館国際研究』第9巻1号, 133-148ページ
- 板木雅彦 (1996-7) 「利子率の決定(上)(下)」『立命館国際研究』第9巻3号, 1996年12月, 48-63ページ, 第9巻4号, 1997年3月, 185-208ページ
- 板木雅彦 (1997) 「社会科学方法論としての弁証法の定式化(上)」『立命館国際研究』第10巻1号, 1997年5月, 71-86ページ
- ウィーナー, ノーバート [1954] (1979)  
『人間機械論 人間の人間的な利用』第2版, 鎮目恭夫, 池原止戈夫訳, みすず書房
- ウィーナー, ノーバート [1961] (1962)  
『サイバネティックス 動物と機械における制御と通信』第2版, 池原止戈夫他訳, 岩波書店
- ウェーバー, M. [1921-22] (1987)  
『官僚制』(阿閉吉男, 脇圭平訳) 恒星社厚生閣  
*Grundriß der Sozialökonomik*, III. Abteilung, *Wirtschaft und Gesellschaft*, Verlag von J. C. B. Mohr [Paul Siebeck], Tübingen, 1921-22, Dritter Teil, Kap. VI, S.650-678.
- 内田義彦 (1985) 『読書と社会科学』岩波新書
- 内田義彦 (1992) 『形の発見』藤原書店
- エンゲルス, F. [1873-83] (1970)  
『自然の弁証法 1, 2』(菅原仰訳) 大月書店(国民文庫)
- エンゲルス, F. [1878] (1952)  
『反デューリング論(上)(下)』(粟田賢三訳) 岩波書店(岩波文庫)
- エンゲルス, F. [1880] (1966)  
『空想から科学への社会主義の発展』(寺沢恒信訳) 大月書店

- （国民文庫）
- エンゲルス，F． [ 1884 ]( 1954 )  
『家族，私有財産および国家の起源』（村井康男，村田陽一訳）  
大月書店（国民文庫）
- 子安増生 ( 2000 ) 『心の理論 心を読む心の科学』岩波書店
- 塩沢由典 ( 1997 ) 『複雑さの帰結 複雑系経済学試論』NTT出版
- 寺沢恒信 ( 1957 ) 『弁証法的論理学試論』大月書店
- 中井正一 ( 1995 ) 長田弘編『中井正一評論集』岩波書店
- 長尾真 ( 1994 ) 『電子図書館』岩波書店
- 夏目漱石 [ 1911 ]( 1986 )  
『現代日本の開化』『漱石文明論集』三好行雄編，岩波文庫
- ヘーゲル，G.W.F. [ 1817 ]( 1978 )  
『小論理学（上）（下）』（松村一人訳）岩波書店（岩波文庫）
- ポーター，E. マイケル [ 1998 ]( 1999 )  
『競争戦略論I，II』ダイヤモンド社
- マルクス，K． [ 1844 ]( 1964 )  
『経済学・哲学草稿』（城塚登，田中吉六訳）岩波書店（岩波文庫）
- マルクス，K．，エンゲルス，F． [ 1845-46 ]( 1956 )  
『ドイツ・イデオロギー』（古在由重訳）岩波書店（岩波文庫）
- マルクス，K． [ 1857-58 ]( 1958-65 )  
*Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie.* 『経済学批判要綱』  
全5冊（高木幸二郎監訳）大月書店
- マルクス，K． [ 1857-58 ]( 1981 )  
『マルクス資本論草稿集 1857-58年の経済学草稿 第1分冊』  
（資本論草稿翻訳委員会訳）大月書店（Karl Marx, Friedrich Engels:  
Gesamtausgabe ( MEGA ) , 2. Abteilung: „Das Kapital“ und  
Vorarbeiten, Band 1, Karl Marx, *Ökonomische Manuskripte 1857/58*,  
Teil 1, Dietz Verlag Berlin, 1976. )
- マルクス，K． [ 1859 ]( 1966 )  
『経済学批判』（杉本俊朗訳）大月書店（国民文庫）
- マルクス，K． [ 第1巻1867，第2巻1885，第3巻1894 ]( 1968 )  
『資本論』全5冊（マルクス＝エンゲルス全集刊行委員会訳）  
大月書店
- 見田石介 [ 1958 ]( 1976 )  
『科学論』，『見田石介著作集 第2巻』大月書店，1976年，所収
- 見田石介 [ 1963 ]( 1976 )

- 『資本論の方法』弘文堂, 『見田石介著作集 第4巻』大月書店,  
1976年, 所収
- 毛沢東 (1957) 『実践論・矛盾論』(松村一人, 竹内実訳) 岩波書店(岩波文庫)
- 森宏一編 (1985) 『哲学辞典』第4版, 青木書店
- リルケ [1903](1960)  
『ロダン』(高安国世訳) 岩波書店(岩波文庫)
- レーニン, V.I. [1914-15](1975)  
『哲学ノート』(松村一人訳) 岩波書店(岩波文庫)
- レーニン, V.I. [1917](1956)  
『資本主義の最高の段階としての帝国主義』(宇高基輔訳) 岩波書店(岩波文庫)
- ワールドロップ, M. ミッチェル (1996) 『複雑系』新潮社



## Formulation of Dialectics as Social Science Methodology: Representations, Forms of Existence and Essence (1)

The objective of this paper and papers to follow later is to formulate dialectics as social science methodology, which is easily operable in our everyday research. In other words, the present author intends to materialize the three laws of dialectics which were formulated by F. Engels in his *Dialectics of Nature*, i.e., the law of transition from quantitative change to qualitative change and vice versa, the law of interpenetration of opposites, and the law of negation of negation.

Section 1 'Representations and Their Purification' deals with representations which form the analytical starting point of conceptualization of a thing as our object of research. We abstract facts and experiences to obtain purified representations of the thing, followed by identifying the forms of existence and functions/barriers, and the processes of formation, transformation into a new stage, and development into a new thing.

Section 2 'The Purified Representation: Elements and Their Relationship' deals with the basic formula of dialectics, symbolized as follows,

The representation of a thing=[relationship elements],  
in which 'relationship' and 'elements' are the moments opposite to each other, indispensable and inseparable from each other. On the one hand, elements are the quantitative moment of the formula and ought to be material elements; on the other hand, relationship is the qualitative moment of the formula. We henceforward understand a thing and all its forms by resolving them into the basic formula.

(ITAKI, Masahiko 本学部教授)